

## 次世代脳プロジェクト 冬のシンポジウム 2016 アンケート結果

(回答者数 77 名 / 全参加者数 470 名)

### ○所属

- ◆大学・大学共同利用機関等の常勤職員 / 45
- ◆大学院生 / 12
- ◆学部学生 / 2
- ◆その他の非営利の学術研究機関に所属する常勤職員 / 8
- ◆企業 / 3
- ◆その他
  - 大学非常勤職員 / 2
  - 大学非常勤講師・非常勤研究員（ポスドク） / 1
  - 公益財団法人（ポスドク） / 1
  - 文部科学省 / 1
  - AIST(産業技術総合研究所) / 1
  - 臨床研究者（自閉症） / 1

### ○参加した日程

- 12月19日（月） / 30
- 12月20日（火） / 40
- 12月21日（水） / 51

### ○参加したイベント（うち有意義と思われたもの）

- a. 新学術領域研究「グリアアセンブリ」「温度生物学」「動的秩序と機能」  
公開シンポジウム / 15 (12)
- b. 新学術領域研究「脳タンパク質老化」公開シンポジウム  
一脳タンパク質の老化と神経変性— / 8 (7)
- c. AMED 企画シンポジウム「革新的技術開発と治療戦略の最前線」 / 25 (16)
- d. 「適応回路シフト」班会議 (CLOSED) / 9 (7)
- e. 「新規採択された新学術領域研究」「先端技術基盤支援プログラム」「科研費の  
制度変更」の概要説明 / 19 (9)
- f. 「日本の神経科学～温故知新～」 / 21 (9)
- g. 「脳科学に活かす人工知能」 / 22 (13)
- h. 学術領域研究「オシロロジー」「こころの時間」公開シンポジウム / 25 (20)
- i. 論文カバーレターとアブストラクト書き方講座 / 20 (18)
- j. 新学術領域研究「適応回路シフト」「記憶ダイナミズム」「マイクロ精神病態」  
三領域合同若手シンポジウム / 36 (29)

- k. 学術領域研究「共感性」「自己制御」合同次世代育成シンポジウム / 6 (5)
- l. 「人工知能と脳科学」班会議 (CLOSED) / 1 (1)
- m. 「こころの時間」班会議 (CLOSED) / 2 (2)

○シンポジウム開催について

- ◆是非継続してほしい / 62
- ◆どちらでもよい / 10
- ◆必要性を感じない / 1
- ◆未回答 / 4

○シンポジウム開催時期について

- ◆今年度と同じでよい / 65
- ◆その他 / 8
- ◆ [ 1月、2月、8月、11月 ]  
[ 神経科学学会とまとめるなど ]
- ◆未回答 / 4

○シンポジウムでのポスター発表について

- ◆実施してほしい / 50
- ◆特に必要ない / 12
- ◆どちらでもよい / 1
- ◆未回答 / 14

○脳科学研究をこれから更に推進するために必要な要素は

- ◆常勤職員の増員 / 45
- ◆大学院生の増員 / 23
- ◆ポストドクとその教育の質の向上 / 27
- ◆補佐員とその教育の質の向上 / 10
- ◆国際的な共同研究 / 19
- ◆支援拠点の充実 / 17
- ◆民間企業との連携 / 18
- ◆出口の見える応用研究の奨励 / 2
- ◆異分野交流・共同研究への推進 / 20
- ◆研究成果の社会への還元 / 6
- ◆教育研究以外の雑用を減らす努力・工夫 / 27
- ◆安心して研究に打ち込める環境作り / 36
- ◆評価・審査時の利益相反排除の徹底 / 2
- ◆ポストドクの増員 / 25
- ◆補佐員の増員 / 25
- ◆大学院生とその教育の質の向上 / 22
- ◆国内研究者間の研究交流 / 27
- ◆大型研究拠点の充実 / 9
- ◆支援の種類の多様化 / 25
- ◆より基礎的な研究の充実 / 31
- ◆一般向けの科学コミュニケーションの推進 / 5
- ◆多様な研究者の意見を取り入れる仕組み / 9
- ◆英語使用の推進 / 7

○プロジェクト（シンポジウム開催、その他の取組）に関してのご意見・ご感想

- ・若手の発表があって良かった。
- ・シニアの方が多くいように思われたので、若手の参加を促すために、ポスター発表がある方がいいように感じた。
- ・会場内での Wi-Fi を整備してほしい。
- ・遠方から来る方も多くと思うので、最終日は昼までが良い。

- ・失敗を恐れず、いろいろな企画を試してほしい。
- ・最先端の研究ばかりで大変良い刺激となった。
- ・横山先生の話は良かった。こういうものをもっと聞きたい。
- ・懇親会以外のディスカッションの場がほしい。
- ・アカデミア以外（製薬協、薬学会など）のシンポジウムの案内をもっと活発にしてはどうか。
- ・脳科学研究の動向を知るうえで、大変役立っている。
- ・告知や情報提供を行うことができるポスターパネルの準備があつて大変良かった。
- ・発表者の先生を含め、一橋大学のキャンパス（国立）へ向かわれた方が若干名いたよ  
うなので、会場の案内がもう少し詳しくければなお良かった。
- ・新学術・次世代脳という取組字体が限られた予算の無駄遣いではないだろうか。All  
Japan とか日本全体とか言うが、化学は普遍的なものであり共同研究をしたいのなら  
各国の優秀な研究者と研究をした方が効率的である。この予算を通常の科研費で配分  
することと比較することを考えた方が良いように思う。予算の配分とは独立に個々の  
研究者が集うことは良いことと思えるが。

#### ○脳科学研究の将来の発展に重要と思われる要素についてのご意見

- ・若手研究者の支援と教育。女性研究者のポストの改善、復帰のチャンスを作る。
- ・文科省、政治家に研究者のコミュニティの意見を伝える、安定的な仕組み。  
その体勢作りのために研究者がつながること。
- ・人材育成のできる人材の育成。
- ・現在、多くの若手研究者が任期付きの不安定な雇用なので、任期なしのポジションを  
増やしてほしい。
- ・やる気のある人とそうでない人を交換する仕組み。
- ・大学やその教員のミッションを再定義し、研究に専念できる環境を作り上げるべき。
- ・ある課題だけに巨額の研究費を投入する一極集中のスタイルではなく、広く浅くでも  
いいから多様な研究を維持しサポートする研究費配分の体制が必要なのでは。
- ・基礎的な視点と共に臨床的な視点を取り入れ、若手医師、薬剤師などを採用する。
- ・現在のように、新学術領域を中心に支援すると、どうしても枠組を外れてしまう研究  
（特に端緒的な研究）ができてしまう。そのような意味で、ボトムアップの基礎研究  
支援を充実できるとより良いように思われる。
- ・年間 1000 万円規模の科研費を多数の研究者に配分する。
- ・多様な人材が研究に専念できる環境。
- ・理論系との交流。
- ・基礎研究の拡充。小規模なラボへも行き渡る科研費の配分。
- ・学会を減らす。

- ・本アンケートで「脳科学研究をこれから更に推進するために必要な要素は？」の選択肢を見て驚いたが、研究の質を決めるのはPIの質が最も重要なのにそれに関するものがない。当たり前のことだが日本の研究の質が下がったことはPIの質が下がったためである。(経営者とのアナロジーを考えると良い。ポスドクや大学院生等は新入社員や若手社員のようなものだが会社の業績向上に彼ら彼女らの質の向上しかないと考える人がいるだろうか。)

「脳科学」という言葉を使うのはやめた方がよい。日本で誰が「脳科学」をしているのだろうか。科学の基本は計測にあるが、脳を計測することはまだ不可能である。

Spinal cord や Peripheral nervous system や昆虫などを研究しているものは「脳」を研究していないはずだが発表者に多くいた。言葉の定義もできない人間が科学者であるはずもない。まずはこの辺りから改善してはどうか。

- ・脳科学、神経科学について、文系側面から理数系の側面まで統合的に学ぶことのできる教育機関の設置。
- ・多様な大学院生（特に物理、化学出身）の獲得、教育。そのためには生命科学のバックグラウンドが少ない大学院生・ポスドクのための脳科学の教育の機会が充実すると良いと思う。グリアアSEMBリが例年行った若手の合宿型セミナーがその一例になったのではと実感している。
- ・マーモセットの供給システムの安定。
- ・安定した身分がなければ、若手はそっぽをむくだろう。今の30代、40代のポスドクを見たら、科学者になれとはとても言えない。
- ・脳は驚くほどの能力があるが、一生の中で2%程しか使われない。人間が存在する目的は「一生、生き続ける」形だったはず。脳科学を通して、人が生きる目的についても合わせて考えることで、新たな知見が得られると思う。
- ・情報の開示と発信。巨額の研究費よりもより多くのチャンス
- ・応用研究を行うことも大切だが、より基礎的な研究ができるような環境の整理、ポジション、若手研究者との横のつながり、国際的なつながりを作るなど幅広い未来の道筋が作れるような取り組みやイベントがあると良い。(学会とは別で参加したい。) 異なる分野(がん、神経、発達、脳)が交わることができるようなイベントがあると嬉しい。
- ・基礎研究の成果(全てとは言わないまでも、そのうちのいくつか)が、応用研究(創薬など)に進んでいることを見えるようにしていくこと。

以上